傀儡の刃、罷り通らぬ白昼夢

作――河瀬羽槻

1

普段からこの街は灰色に染められていたけれど、今朝は特段に淀んだ色をしていた。

少しばかり普段より早く家を出てみれば、降り出すほどではないけれど、光を遮るには十分な灰色の雲が空にかかっていた。その下に押し込められた秋は、曖昧な終わりへと導かれていくのだろう。

ひりついて吹く風は冷たくて、息をする度私の喉を渇かしてゆく。海沿いの寂れた工業都市だった私の故郷だって似たようなものだけれど、風が寂しさと重なってこんなに痛々しく肌を刺してくるなんてことは、海から遠いこの街に来るまで知らなかった。

坂を下りて駅前に出る。季節感のない背広に身を包んだサラリーマンやらなんやらが、路線バスから淡々と吐き出されて生気の薄い群れを成す。私もその中に紛れ、ゆらゆらと階段を上っていく。都心までは軽く一時間ばかり。生気とて失せようというものだ。

私は改札に入らずに、そのまま駅の反対側へと抜ける。改札口ではゾンビめいた企業戦士の群れと入れ替わりに、垢抜けない感じのセーラー服を着た女の子たちが出てくる。

真夜中の水面のような藍色に、濃く煎れすぎた紅茶を透かして見たようなくすんだ緋色のスカーフ。悲しいことにその色は、うす寂れたこの街の景色によく似合ってしまっている。もう少し今時っぽい制服にしてあげた方が良いんじゃないかと見る度に思うけど、そうもいかない理由の群れに搦め取られているのだろう。

「そういえばさ、保原さんって結局どうなんだろうね？」

「保原？　誰だったかしら？」

すぐ前を歩いてる女の子が話しかけて、隣の女の子が首を傾げる。お下げ髪が揺れる。

「え……忘れるかな普通。あの数学のだよ、今病欠してる」

「ああ。あの人ね。しばらく見ていなかったから」

歩く度に小刻みに。隣の子に相槌を打てばもう少し。束ねられたポニーテールの先端が、不規則な拍子を刻む。

「綾華は本当に人に興味ないよね……ま、それはいいとしてだ。お姉ちゃんが見たらしいんだよね」

「保原先生を？」

綾華と呼ばれた少女の横顔が覗く。大したお化粧もしてないのにぱっちりした大きな目は、あと三歩ぐらい行きすぎればバランスを崩しそうなぐらい。

「そう。学校から離れた工業団地の方らしいんだけどさ」

「へえ。なんでそんなところに？」

控えめな唇が動いて問いを返す。澄んでいてなおよく通る、鈴を転がすような声。なんだか――不思議な魅力のある子だ。

「バイトしてんの。倉庫で」

「さすが玲奈のお姉ちゃんね。頼れそう」

「ふふ、二人とも体力だけだからね」

正面から見たら、吸い込まれるような危うい可憐さなのだろう。想像しただけで、胸が高鳴って血の巡りが加速してくる。目の前がぼやけてくるぐらいに――明らかに、何かが変だ。なぜ私は、前を歩いてる女の子を見てこんな欲情めいた気持ちになってるのか。

それとも何か。普段より早く起きた所為で貧血でも起こしてるのだろうか。実家の頃より不健康な生活なのは否めないけど、一人暮らしで数ヶ月。こんな時期にってのも妙な話だ。